
イガイ

小松鴉変

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イガイ

【Nコード】

N7951I

【作者名】

小松鴉変

【あらすじ】

私はいつだってふと気づけばそこにいた。

暗くて、怖くて、逃げたくて、その時パツと光が差し込んで・・・

「Ladies and gentlemen!」

- 私猪飼から皆様へ「イガイ」なお知らせがあります。

Prologue： 此処は何処。

そこは夜と言うにはあまりにも寂しいが、かといって
無と言うには賑やかだろう、そんな闇色に染まった空間だった。

私はそこにぽつんと立っていて、自分がその中心にいるのかそれとも
端に居るのかも分からずじまい。

要するに八方塞というやつで、立ち往生していた。
すると、突然

パッ

と音が鳴るように光が差し込んだ。

それはまるで舞台を照らすスポットライトのようで、一点のみを明るく
照らしている。

チカッ

チカッ

点滅する光は実に頼りなく、感じるものは恐怖よりも
学生の間よく経験した

「この蛍光灯切れ掛かってない？何かチカチカしてない？ねえ、ち
よっと本当に大丈夫なの？これ」

というような類の不安の方が強かった。

だが、その点滅に連動するように聞こえ始めた声に私はゾツとした。
きっと今の私の顔色はこれまで見たことがないほど悪いのだろう。
緊張からか恐怖からか、ヒュッと喉から空気の抜けるような音がし
た。

・これ多分、小さな子供の笑い声だ。
どうしよう、怖い。凄く怖い。

背中に嫌な汗をかいてしまい、気分は最高に悪い。
私思わずその場に座り込んで耳をふさぐと、今度は

パッ

先ほどまで照らし続けていた光が消え、暗転。
私はどうやら少なからずあの光に安心感を抱いていたようで、消えた途端言いようのない不安に駆られてしまった。

ああどうしようどうしようどうしよう。
ていうか、今更だけどき。
自分でも吃驚するぐらいな今更加減で涙出てきそうだけどき。

此处、何処よ……！

|

A c t 1： え、誰？ていうか、何？

私は心で叫んだ。友達が私の彼氏を寝盗ったことを知った時よりも叫んだ。もう絶叫レベルで叫んだ。

- 後に残ったのは虚しさだけだった。

光が消えた後、オロオロしていた私を他所に周りは微妙に変化していた。

暗闇の中で目を凝らせば、人影のようなものが蠢き忙しなく何かを動かしているように見えた。私は何となくそれを見て

舞台の場面が切り替わっているみたいだ、と思った。

ぼう、と蠢く影達を見ていたら次第にそれは数が少なくなつて、最後には蠢くものが一つも見えなくなった。私の周りはそれを見てざわめき拍手喝采、ああそんなに拍手するぐらい人がいたんだあとまたぼんやり思っていると、小さかった子供の笑い声が大きくなり反響すらしていることに気づいた。

反響、反響ねえ。

- は？ 嘘、反響してる？

ということとは、此処には壁が、終わりがある。

壁が、壁があるなら、迷路の要領でその壁を伝いながら歩けば外に出られたり、なんてことが出来たりするんじゃないのか。

私は不意に現れた希望に思わず歓喜の声をあげようとした、-とこゝろで気づいてしまった。

ゴクリ、と自分の喉が緊張で唾を嚥下する音が何だか酷く大きく聞こえた。

拍手とか、笑い声とか、いつ、止んだ？

怖い。

聞こえてたら聞こえてたで怖かったけど、聞こえなくなったらなつたで、怖い。怖すぎる。

そんな私の内心の不安を込めた呟きを慰めてくれるとでもいうのか、

パッ

最初の光よりも若干オレンジ味を増した光が一点を照らす。
私はそれを見て思わず安堵の息を零したが、ふと違和感を感じる。
スポットライトの下、何か、居る。

第一村人発見

って、違う違うそうじゃない。落ち着いて私、落ちついて。
そう、人が立っていた。今まで何もなかった光の下に男が、一人。
前屈みに立ち、目深に被ったシルクハットの縁を押さえているその
男の表情は、少し離れて座っている私からは分からない。

黒いシルクハットに白いシャツ、黒いロングコート。
そして黒い編み上げのブーツに入れられたズボンも黒かった。

暗闇に黒い衣服って、お前。

私は思わず突っ込みたかったが、何となく周りが怖かった。
こう、空気が真剣というか、痛いというか。だけど黒い衣服の中で
唯一白かった男のシャツはぼんやりとその場に浮かんで見えて少し
気味が悪いなあと思った。

男は被っていたシルクハットを左手で軽く円を描きながら取り、右
手は無絵に添えて恭しく礼をとる。身に纏った黒いロングコートが
動きに合わせてふわりと靡いた。

ゆっくりと身体を起こしたが顔はまだ俯かせたまま。私は一瞬、男
の口が耳まで裂けている様に見えて小さく悲鳴をあげてしまいあわ
てて口を両手で塞いだ。

だが、ゆっくりと上げられた時には目は伏せられてはいたがとても
穏やかで、口は裂けてなどいなかった。

目の錯覚、だったのだろうか。

いや、でも、と何度か目を擦ったり瞬きを繰り返してもう一度男を目を細めて見てみたが、やはり口は裂けていなかった。

男はスツと目を開き、こちらに気づいた様に瞬きをしてから緩やかに目尻を細めて微笑んだ。男がこちらを向いたと同時に何故か光が一つ増え、あるうことか私を照らしつけた。

「眩っ」

向けられたスポットライトが煩わしくて、思わず声を漏らしながら私は盛大に顔を顰め、目を細めるとそれまで静かだった周りがクスクスと声を漏らす。

―― いやいや笑い事じゃないんですけど。

A c t 2 : 「私、猪飼と申しまして」

- むしろ真剣なんですけど！

私はまた叫んだ。吼える様に叫んだ。勿論心の中で叫んだ。赤子も泣き出す大絶叫だ。

- 残ったものは、観客（？）の失笑だけだった。

男はそんな私にはお構いなしで、シルクハットを掴んだ左手を下ろし右手はそのままに目礼をして口を開いた。

「私はイガイ。」

上から読んでも下から読んでもイガイ、と申しまして。」

「漢字はほら、このように。」

Act 3：しらねーよ

私の右腕はきつと稀に見るチキン肌なのだろう。

さつきからブルブルと腕が振るえ、背中からゾゾと寒気が這い上がってきている。

私の今のこの状態を生み出している原因は、絶対目の前のこの男にある。

多分、とか、きつと、とかそんな曖昧さは微塵もないのだ。

「イガイ、のイは猪と書きます。左はけものへんに右が人気者の者と・・・そうそう。

イガイ、のガイは飼と書きます。左は・・・なんだっけ・・・あ、食べ物の食！

そう、食に右が司るで・・・ああ、司法の司です・・・そうそう。

「

- 何故私は今、この不信感の塊のような男に男の名前の漢字の指

導をされているのだろうか。甚だ疑問でならない。

ほら、簡単でしょう？と男は口先だけに胡散臭い笑みを浮かべて私の右手を自身の左手で掴み、手のひらに人指し指で「猪飼」の字をなぞった。

原因は、これだ。

男に手を掴まれている。知らん男に手を掴まれている。初対面の男に手を掴まれている。

別に男に手を掴まれて振り払うほど嫌いなわけではないが、初対面の男に手を掴まれて笑っていられるほど男が好きなわけでないのだ。むしろ苦手。故の、チキン肌なのだ。

私は目の前で腰を落として軽く足をM字に開いてしゃがむ、いわゆるヤンキー座りと称される座り方をする男をじっと見つめてみる。

染めたのか、はてまた天然色なのか。

その男、猪飼の髪は鮮やかな赤、まるで鮮血を塗り付けた様な不透明な赤髪だった。

顔色はあまり良いとは言えず唇も薄く血の色を失っており、緩やかに細められた双眸は深緑で私は密かに男をクリスマス野郎と呼ぶことを決意した。

ていうか、

「あの、」

手、放してもらえないですかね。

何故か私の手は未だに猪飼が握り締めまま離さないという理解したい現象の渦中にある。別に手を握られるという行為を恥ずかしく思っている訳ではないし、今はチキン肌を止めたいからという訳だけでもないのだ。自分でも良く耐えられるなと思えるほどの急展開に対する、知らないことへの恐怖と緊張の為に滲んで来る手汗が気持ち悪くて仕方がないのだ。

早くこの不快感から開放されたいと勇気を振り絞り口を開いたのに、猪飼はそれを空気とともに玉砕する様で

「何で？」

と心底驚いたとしても言うような表情を浮かべて見せ、更に恥らう乙女のように薄く頬を上気させて目を伏せたかと思うと鼻を連想させるように微笑んで見せた。

「・・・・・・・・。」

言葉は、ない。

そこに沸と湧いたのは初対面の人間に抱くにはいささか物騒だと思われる、明確な殺意だけである。

放してくれないならいっそ、と掴まれた手に切り忘れた自分の長い爪を立てる。

自分の爪が猪飼の手の薄皮を切り、血を滲ませた気がして口の端を緩めると、猪飼の右手が私の手を挟む様に包みんできた。そして慈しむ様に優しい声音でこう言うのだ。

「痛いね？」

と。

痛いのは爪を立てられた自分だろうに、何故だか猪飼が私を諭すように微笑んだところで私は違和感に気づく。じっと目を凝らすと、すぐにその違和感の正体が分かった。何で今まで気づかなかったんだろう。ああ、

-
ああ猪飼あなた、透けてるじゃない。

Act 4： 人はそれをカンニングペーパーと呼ぶ

まさかの透明人間かよ、猪飼。

口に出したつもりはなくても、猪飼は視線だけで悟ったらしい。
困った様に眉尻を下げて微笑むと

「私はイガイだからね」

- 「意外」に「猪飼」は透明人間でしただけか。笑えない冗談はよしてくれ。

猪飼はそういつて私の手をゆっくりと離れた猪飼の手は、なかった。
笑えない冗談はさっきのだけで十分だったのに。

比喩ではなく、本当にないのだ。

白いシャツの袖口から出ていた、私の手をさっきまで掴んでいたはずの手、どこるか手首から先が。

ただ、可笑しいことにグロテスクに血が滴っている訳ではないのだ。

例えるならそう、マネキン。マネキンの手首を切り落としたらこうなるだろう、そんな感じた。

言葉を失う私を他所に猪飼は、あらやだーとおばさんくさいことを言い、軽く肩を竦めて「やれやれ」というようなジェスチャーをしながら笑って見せた。

「時間がね」

足りないよね。

そう言っただけ猪飼はポケットに手を突っ込んで何かを出した。いや、正確には出そうとして、消えた。

今度は手が消えた様に、そう正直言っただけ猪飼本人する気が付いていないんじゃないかと思えるほどの自然さで、猪飼は消えたのだ。

パチ・・・

パチ・・・

パチパチパチ

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ
パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ
パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ
パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ
パチ・・

－ああ、拍手が五月蠅い。

猪飼が消えて舞台終了ってか、これも全部シナリオだったってか。

私はそれにまんまと踊らされていた舞台の一部で役者でしたってか！
！監督出せ監督！

私はケツと柄悪く吐き捨てるように声を出してから、ふと観客からではない別のところからの強い視線を感じたような気がして目を泳がした。

「・・・・・・・・・・。」

睨む様に目を凝らすと白い物が浮かんで見えたが、私はそれを見つけた途端、無視したい衝動に駆られた。

” エース、台詞「始まるのね・・・」を告げ舞台を仰ぎ、イガイの時計を胸に抱き終演 ”

人影が焦る様に忙しく揺らすそれを、人はカンニングペーパーと呼ぶ。

Act 5：とりあえず関係者は一列に並べ

私は見つけた。見つけてしまったのだ。
その

- まごうことなきカンニングペーパーを。

何この舞台裏の隠し技的な物。嫌に現実味があつていつそ怖いわよ。
私は様々な不満を胸に抱きながらも口を開いた。

「始まるのね……」

- カンペの人も真っ青な大根役者とは私のことである。

文化祭の時に演劇部で催した劇で私が恐れ多くも主役に抜擢された時、後々泥棒猫になる予定な友人も監督に抜擢されていたわけで、その彼女から

「お願いだからあ！立つてるだけでいいからあ！喋らないでええ！口パクでええ！舞台袖に喋り役の人入るからああああ！」と泣きながら頼まれたのは懐かしい思い出である。でも主役が吹き替えて、そのところどうなのよ。泥棒監督さん。思わず笑っちゃうわアッハッハッハ！

仕方なしに遠い目をしながら舞台を仰げば、スポットライトが直に目を焼き舌打ちをしかけた。気分は最悪、カンペの人の掴めそうにない胸倉を掴みあげて「この蛆虫が！」と吐き捨てたくて堪らない。

しかし猪飼の時計というのは何のことだか、さっぱりぼんである。今古いとか思った奴、後で舞台裏に集合。特にそこでカンペ揺らしてる野郎、お前、ダッシュな。でも本当になんのことだか。

私が猪飼からそれを受け取ったという覚えもないし。訳が分からないからとりあえずカンペの人を睨みつけると、彼(?)は必死に私の足元を指差していた。ゆっくりと視線を落とせばそこにはアンティークの懐中時計が落ちていて、私はぼんやりと

ああ、これが猪飼が出そうとしていたやつかあ

と根拠もないのにそれがまるで事実だとしても言う様にすんなりと受

け入れた。

鎖を指に絡め持ち上げると、意外に重くて私は少しだけ驚いた。

持ち物まで「イガイ」とか凄い徹底済みだわ、凄いよお前。

そしてそれを胸元に持っていき両手で包むように握りこむと拍手喝采、どうやら無事に終わったらしい。カンペの人がカンペを嬉しそうに横に振っているように見えるが、私はそれを見て盛大に足を打ち鳴らした。

” お前にしては良くやった ”

とりあえず関係者は一列に並んでみる、まずはそこから始めようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7951i/>

イガイ

2010年10月9日04時33分発行